

第13課 認知症は社会のお荷物か その2

前課では認知症に関する知識を学んだ。この課では、具体的なケースを通じて、認知症の症状と介護のあり方を段階別に学ぶ。取り上げるケースは、認知症で一番症例が多いアルツハイマー型認知症である。すでに亡くなられた方であるが、ご遺族の許可をいただき、ここに事例としてご紹介させていただく。

そして、最後に、「認知症は社会のお荷物か」への回答を試みることにする。



第1セクション 初期（健忘期）

それでは、事例をご紹介します。まず、主人公の生活歴です。

氏名 おくの 奥野とめ（仮名） 女性

生活歴 昭和9年、石川県の漁師の次女として生まれ、高校卒業後、地元（じもと）の会社に就職（しゅうしょく）。漁師と結婚して、男2人女1人、計3人の子供（こども）を育てる。子供たちが独立（どくりつ）した後、夫（おっと）と二人暮らし（ふたりぐらし）だったが、夫が出漁（しゅつりょう）中に事故で死亡してからは一人暮らしとなった。79歳になった時、一人暮らしが心配（しんぱい）になった子供たちが相談（さうだん）した結果、東京（とうきょう）に住む長男（ちやうなん）が引き取るようになって、生まれて初めて東京にやって来た。84歳で死亡。

次に、とめさんが東京に来てからの状況を詳しく見てみましょう。

引っ越し後まもなくの状況

とめさんは慣れない都会暮らしに戸惑いました。もちろん、知り合いや友人もいません。長男の嫁とも相性が悪く、ほとんど口も利かない毎日が続きました。それでも、とめさんは趣味の裁縫を自分の部屋でコツコツと楽しんでいました。それだけが生きがいと言えるものでした。田舎から持参したものはほとんどありませんでしたが、結婚した時に撮った夫との写真をたまにそっと隠れて見るがありました。

記憶障害が出てきた時の状況

東京に来てから1年くらい経った時からでしょうか、とめさんは段々と物忘れが多くなってきました。ある日曜日、朝食後すぐに台所にやって来て、「〇〇さん、朝食はまだかい」と言ったので、嫁はびっくりし、思わず、「お母さん、さっき食べたばかりでしょ！」と強く言い返しました。すると、とめさんは「姑に食べさせないとは、なんてひどい鬼嫁なの！」と、ひどく怒って暴れました。たまたま日曜日で長男が在宅していたので、その日はなんとか長男がその場を収めました。ところが、その後同じようなことが何度も繰り返されたのでした。

このように、アルツハイマー型認知症の初期症状は、記憶障害が主です。だから、この時期を健忘期とも言います。記憶にはいろいろな種類がありますが、この時期は、特に、近時のエピソード記憶(数分から数日前の出来事に関する記憶)が障害されます。

では、このような場合、周りの人はどのように対応すればいいのでしょうか。上の例では、嫁はとめさんにきつく当たってしまいましたが、もちろん、それではいけません。なぜなら、とめさんは食べたこと自体を忘れてしまっており、嫁

から「食べたでしょ」と反論はんろんされたことは、まったく身に覚えあいてのないことを相手から言われたことになり、自分の存在そんざいそのものが否定ひていされたという気持ちになったからです。だから、とめさんは怒りあは暴れたばのです。

このような場合、介護する人は、物忘れを責せめないで、根気こんきよく対応する必要があるあります。何回も同じようなことが続つづくかもしれませんが、その都度つど、初めて聞いたように対応しなければいけません。

考えよう

- 1) 本文の事例において、なぜ東京の長男がとめさんを引き取ることになったのか想像そうぞうしてみましょう。
- 2) 本文に「生きがい」が出てきますが、これは何を意味するか、具体ぐたい的な例を挙あげて説明してください。
- 3) 本文に「記憶にはいろいろな種類があります」と書いてありますが、どのような種類があるのか調べてみましょう。

4) 本文に「この時期は、特に、近時のエピソード記憶（数分から数日前の出来事に関する記憶）が障害されます」と書いてありますが、その理由を考えてみましょう。

5) 本文の事例で、とめさんはなぜ、食べたのに食べていないという発言を繰り返したのでしょうか。彼女の心理を想像してください。

発言
(はっげ)

6) 本文の事例で、嫁はどのような対応をするのが良かったのかを考えてみましょう。

7) とめさんが認知症になったことと、東京に引っ越したことは関係があると思いますか。

第2セクション 中期（混乱期）

とめさんにはまず、記憶障害が出ましたが、次に、時間の見当識障害が出始めました。例えば、朝なのに、夕方だと思い込んで、買い物に出かけようとしたこともありました。そして、東京に来てから2年後^{あた}辺りから、場所の見当識障害が出てきました。たまに嫁^{よめ}の依頼^{いらい}で近くのスーパーに買い物に行っていたのですが、帰り道がわからなくなり、迷子^{まいご}になってしまったのでした。その時は運よく警察^{けいさつ}に保護されたので、事^{こと}なきを得^えましたが、嫁はその後、決してとめさんに買^{たの}い物を頼まなくなりました。

唯一^{ゆいいつ}の外出^{きかい}の機会^{きかい}だった買い物ができなくなり、とめさんはますます自分の部屋に閉じこもる時間が長くなりました。そんなある日のことでした。とめさんは用^{よう}を足^たすため部屋を出ましたが、そんなに大きな家ではないのに、トイレの場所がわからなくなったのでした。そして、とうとうお漏らし^もをしてしまったのです。そこへ偶然^{ぐうぜん}嫁^{よめ}が通りかかって、「あ、お母さん、何をしていますか！」と大きな金切り声^{かなき}で叫^{ゆか}びました。とめさんは、床^{くず}に崩^おれ落ちてしまいました。

尿失禁^{にょうしつじん}事件^{じけん}の後、嫁^{よめ}からオムツを強要^{きょうよう}された^{きょうよう}とめさんは、何もする気が起きず、それまで毎日していた裁縫^{さいほう}もほとんどやらなくなりました。さらに、洗顔^{せんがん}や歯磨^{はみが}きだけではなく、あれほど好き^{ふろ}だったお風呂にも進^まんでは入らなくなり、嫁が無理^{あば}に入れようとすると、暴^{あば}れだして抵抗^{ていこう}するようになりました。

まるで人格が変わってしまったのに驚^{おどろ}いた長男^{おとこ}と嫁は、このままではいけないと考え、区役所^{くやくしょ}の福祉課^{ふくしか}に相談^{さうだん}しました。そして、介護保険^{しんせい}の申請^{しんせい}を行うことになり、調査^{ちようさ}の結果、アルツハイマー型認知症^{アルツハイマー型認知症}で要介護1という認定結果^{にんてい}が出ました。その後しばらくして、とめさんは週2回、近くのデイサービスセンターへ通うことになりました。

このようにアルツハイマー型認知症^{アルツハイマー型認知症}の中期になると、場所^{けんとうしき}の見当識障害^{けんとうしき}が出たり、介護への強い抵抗^{ていこう}を示^{しめ}したりして、混乱^{こんらん}を示^{しめ}すようになります。だから、

この時期を混乱期と呼びます。このような時、介護する方も相手の混乱に巻き込まれ、同じように混乱する危険性が高いため、冷静に対応することが求められます。家族だけの力では限界がありますから、介護保険を申請して、外部の介護資源を上手に活用することが賢明です。



考えよう

- 1) 時間の見当識障害が出た場合の対策を考えてみましょう。
- 2) 家の中で場所の見当識障害が出た場合の対策を考えてみましょう。
- 3) 尿失禁をしてしまった時のとめさんの心理を想像してみましょう。

4) 尿失禁^{じけん}事件後のとめさんの急^{きゅうげき}激な変化の理由は何だと思えますか。

5) とめさんに対する嫁^{よめ}の対応にはいくつか問題がありそうです。どんな点か考えてみましょう。また、どう対応すべきだったのでしょうか。

6) 本文に「人格」が出ていますが、「性格」とどう違うのか、^{ぐたい}具体的に説明してください。

7) 介護^{しんせい}申請^{てつづ}の手続き^{くやくしょ}を区役所^{しりょう}などから資料^よを取り寄せて調べてください。

手続き (てつづき)
取り寄せる (とりよせ)

8) デイサービスセンターについて調べてみましょう。また、なぜとめさんはそ

こへ行くことになったのでしょうか。

9) 本文には「家族だけの力では限界があります」と書いてありますが、あなたは
はどう思いますか。

10) 本文に出ている「外部の介護資源^{しげん}」にはどのようなものがあるか調べてみま
しょう。

第3セクション ^{しゅうまつ}終末期（寝たきり期）

デイサービスセンターへ通い始めてから1年後、とめさんは82歳になっていました。生まれつき心臓が弱かったため、デイサービスセンターでもあまりリハビリに^{せい}精を出さなかったこともあり、^{きゅうげき}急激に運動機能も落ちてきました。そのため生活^{ぜんぱん}全般に介護が必要となったので、家族は同居を^{あきら}諦め、^{とくべつようご}特別養護老人ホームへの入居を考えるようになりました。直前の介護認定調査で要介護3と認定されたことも大きな要因です。

長男と嫁は急いで数多くの^{とくよう}特養の^{しりょう}資料を集め、^{ひかく}比較をしました。^{けっきょく}結局、ちょっと遠いが、^{となり}隣の^{かながわけん}神奈川県にある特養が一番早く入れそうだったので、そこでお世話になることに決めました。

病院へ検査に行くと、^{うそ}嘘を言ってとめさんを^つ連れ出し、そのまま特養に入居させましたが、とめさんは数日間ずっと、「ここは家ではない、今すぐ家に帰る。早く長男を呼べ！」と^{あば}暴れました。この間、家族はあえてホームには顔を出しませんでした。その後とめさんはようやく^お落ち着き、^つ帰宅願望は出なくなりました。

その特養は、^{まえひょうばん}前評判はそんなに良くはなかったのですが、入居してみると、^{よそう}予想以上に良いサービスだと家族は感心しました。というのは、とめさんが以前より少し元気になっていたからでした。食欲もあり、家族が^{たず}訪ねると^{うれ}嬉しそうに話をしてくれ、車イスで^{いっしょ}一緒に^{にわ}庭を散歩するまでに^{かいふく}回復していたのでした。また、こんなこともありました。ある日、^{よめ}嫁が様子を見に行った時のことです。とめさんはデイルームで^{なかよ}仲良しのおばあさんと話をしていたので、嫁はその会話をそばで聞こうとしたところ、^{おどろ}驚いたことに、二人の会話はまったくかみ合っていなかったのです。しかし、不思議なことに、二人はとて^{うれ}も嬉しそうに会話を楽しんでいたのでした。

ところが、それから1年後、83歳になったとめさんは、とうとう寝たきりになってしまいました。このホームは^み看取りまで^{せきにん}責任を持ってやってくれる所なので、家族は本当に安心でしたが、やはり母親の先が長くないことは^{かくご}覚悟しなけ

ればならず、特に長男はとても寂しい気持ちになりました。

とめさんはほとんどしゃべらなくなりました。食欲もなくなり、とうとう口から食べる事もできなくなったので、医者**の**強い勧めで胃ろうを付けることになりました。そんなある日、長男と嫁は久し振りにホームを訪ねました。しかし、とめさんが嫁に向かい、か細い声で、「この女の人は誰だい」と言うので、二人はとても悲しい気持ちになりました。

そして、とめさんはそれから1年後、心不全で亡くなりました。享年84歳。ごく平凡な婦人の大往生でした。納棺の時、長男はとめさんがずっと持ち続けた結婚当時の写真を1枚、そっと棺桶の中に忍ばせ、両手を合わせながら、深々と、とめさんに頭を下げました。

このように、アルツハイマー型認知症の終末期では、人物の見当識障害が出たりします。寝たきりになる人も多いので、終末期を寝たきり期とも呼びます。言葉によるコミュニケーションが難しくなるので、介護士は身体介護だけに注意が向きがちになりますが、もちろん、認知症の人の心はまだ生きています。何を言っても相手は分からないだろうと勝手に決めつけないで、時には身体に優しく触れながら、相手の心に静かに語りかけていくような介護を心掛けましょう。それには、アメリカ生まれのバリデーションや、フランス生まれのユマニチュードという手法が参考になります。



1) 本文に「リハビリ」が出ていますが、どのような意味なのか、調べてみましょう。

2) 本文に出ている「特別養護老人ホーム」について調べてみましょう。

3) 本文に、「直前の介護認定調査で要介護3に認定されたことも大きな要因です」と書いてありますが、これはどういう意味か、調べてみましょう。

4) 本文のケースでは、東京都に住んでいる人が神奈川県の特養に入居することになっていますが、このようなことは可能なのでしょうか。

5) 本文に、「病院へ検査に行くと、嘘を言ってとめさんを連れ出し、そのまま特養に入居させました」と書いてありますが、どうして嘘を言ったのでしょうか。

6) 本文に、「この間、家族はあえてホームには顔を出しませんでした」と書いて

てありますが、どうしてだと考えますか。

- 7) 本文にとめさんと仲良しさんとの不思議な会話について書いてありますが、具体的にどのような会話か想像してみましよう。また、どうしてそのような会話が成り立つのか考えてみましよう。

成り立つ
(なりたつ)

- 8) 本文に「看取り」が出ていますが、どういう意味か調べましよう。『MANGA 介護の日本語初級下巻』第25話「終の棲家」を参考にしてください。

- 9) 本文に「胃ろう」が出ていますが、あなたは「胃ろう」をどう評価しますか。『MANGA 介護の日本語初級下巻』第25話を参考にしましよう。

- 10) 人物の見当識障害が出た時にはどのように対応すればいいのでしょうか。

11) 納棺時の長男の気持ちを想像してみましよう。

12) 見当識障害の順番が、時間→場所→人物となるのはどうしてなのか、考えてみましよう。

13) 本文に出ている「バリデーション」を詳しく調べましよう。

14) 本文に出ている「ユマニチュード」を詳しく調べましよう。

第4セクション 認知症は現代社会に対する警告

厚生労働省は、団塊の世代が75歳を超える2025年には、認知症患者が全国で700万人を超えるとの推計値を発表している。これは高齢者の5人に1人の割合である。もし、これが現実となれば、社会にとって大きな負担になるとの理由で、政府は躍起になって認知症の予防に努めている。例えば、認知症予備軍である軽度認知障害（MCI）の人を早期に見つけようとしたり、様々な非薬物療法を推進したりしている。

しかしながら、これらの動きは、「認知症は社会のお荷物」と言っているに等しい。すなわち、大きな負担がかかるからお荷物だ→しかし、予算は増やせない→だから予防しよう、という考えである。でも、「お荷物」という考えは、あまりにも認知症の人々の立場を無視した、一方的な捉え方ではないだろうか。

これまで世界中で、認知症を生きている人々が自らの気持ちを公に発言している。2001年にオーストラリアのクリスティーン・ボーデンさんが、2004年には日本の越智さんが、国際アルツハイマー病協会の会議で発言している。彼らの切実な声に耳を傾けると、彼らがいかに人生を真剣に生きていこうとしているのかがわかる。また、ある認知症の方のフェイスブックには、「決して認知症当事者は社会のお荷物的な存在ではないことを示したい」と書かれている。

認知症を生きている人々や、認知症ケアに長年携わっている医師などの発言を聞くと、そこには共通した考えがあるようだ。それは、「認知症になって言葉が失われても、心は生きている」ということだ。重度の認知症の人は、一見すると人間失格のように見えるが、どっこい人間存在の奥深いところで生きている。認知よりも心で生きている。彼らを凝視すれば、生にとって認知がそんなに大切なのかと疑いたくなる。すなわち、知性、論理、言葉があまりにも肥大化してしまった現代社会が失いつつある、感情、心、魂というものの大切さが、認知症の人の生き様を見ると、分かってくるのだ。であれば、認知症は、現代社会に対

する警告^{けいこく}ではないだろうか。もし、そうであれば、認知症は社会のお荷物でないどころか、立派^{りっぱ}に社会に貢献^{こうけん}していると言える。

近年、企業人^{きぎやうじん}やNPOや社会起業家^{きぎやうか}たちが集い、認知症を医療・福祉^{ふくし}の枠組み^{わくぐみ}だけではなく、社会や地域^{ちいき}のデザインの問題としても捉え^{とら}、未来^{みらい}の町作りやビジネスに生かそうと話し合っているそうである。きっと、彼らの考えには私の考えと共通する点があると信じたい。介護士もこのような活動^{せつきよくてき}に積極的に参加して欲しいものだ。



考えよう

- 1) 本文に出てくる「団塊^{だんかい}の世代^{せだい}」について調べましょう。
- 2) 厚生労働省^{こうせいろうどうしょう}によると、近い将来^{しょうらい}日本人の5人に1人は認知症になるらしいが、この割合は高いと思いますか。

3) 認知症予防のための非薬物療法を詳しく調べましょう。

4) 筆者は、政府の認知症予防のための対策は、「認知症は社会のお荷物」という考えに等しいと断定していますが、あなたはどのように思いますか。

断定する
(だんていす)

5) 認知症の人の発言をネットや本で読んでみましょう。あなたの国の人はいますか。

6) 本文に「認知症になって言葉が失われても、心は生きている」と書いてありますが、具体的にどのようなことか説明してください。

7) 本文に「人間失格」という言葉が出ていますが、どのような意味か、説明してください。

8) 本文に「知性、論理、言葉があまりにも肥大化してしまった現代社会」と書いてありますが、あなたはそう思いますか。

9) 筆者は「認知症は、現代社会に対する警告」だと書いていますが、筆者の考えをもっと詳しく説明してください。

10) もし、認知症が現代社会に対する警告だとすると、どうしてそれが社会に貢献することになるのか、説明してください。

11) 認知症を社会や地域のデザインの問題としても捉え、未来の町作りやビジネスに生かす、とは具体的にどのようなことでしょうか。

12) 本文に「彼らの考えには私の考えと共通する点があると信じたい。」と書いてありますが、共通する点とは何だと思いますか。

13) 本文には書いてありませんが、認知症を生物学的な知恵だと考える人もいます。どのようなことか考えてみましょう。

知恵
(ち)